

ロバート・ローウェルの「ベニート・セレーノ」における「黄熱」の考察

——日米関係史を中心に——

小林 愛 明

はじめに

本論では、ローウェル (Robert Lowell, 1917–77) の *The Old Glory* (以下 *TOG* と略す) に収録された「ベニート・セレーノ」("Benito Cereno") を、「黄禍論」の観点から考察する。それによって、人種問題の複雑な歴史を抱えるこの作品に新たな解釈の可能性を投じる。メルヴィル (Herman Melville, 1819–91) の原作を劇に翻案した本作は、まず1964年に *Show* 誌で発表された (以下「旧ベニート」と記す)。本としては、細部を変更した物 (以下「新ベニート」と記す) が「エンデコットと赤い十字架」と「僕の親戚モリヌー大佐」を合わせた3部作として1965年に出版された。その後、「エンデコット」に変更を加えた第二版が1968年に出版された。

「ベニート」を「黄禍論」と関連付ける理由は以下による。ローウェルは、第二次世界大戦時から日米関係を強く意識していた。例えば、1943年、ローウェルはルーズベルト大統領に手紙を送り、良心的兵役拒否者として、当時の外交政策を次のように批判した。「無条件降伏を要求する事で [. . .]、我々はドイツと日本を永久に破壊するための戦争を、道義を欠いたまま無慈悲にしかける事になる」、「アメリカの支配者達はドイツと日本への無制限爆撃を約束した。[. . .] これが実行されれば、国家間の正義と博愛の法に対して、マキャベリ主義的な侮辱を表明する事になる」(*RLCP* 369–70)。また、ローウェルは1964年に発表した「北軍戦没者のために」("For the Union Dead") でも、「ボイルストン通りの広告写真には／煮えたぎる広島の下に／あの爆風に耐えたモーズラー金庫 (「千歳の岩」) が／置かれている」と歌って広島への原爆投下を批判している (*CP* 377)¹。以上をふまえて「ベニート」を読み直すと、新旧ともに「黄色」のイメージが多用されている事に気づく。だが、従来の批評は、「ベニート」を黒人差別問題、つまり、白と黒の枠組みで理解し、日米関係の表象を読み取るものは僅かしか存在していない。当然、本作を「黄禍論」の観点から論じたものは皆無である。

以下、最初に従来の批評を取り上げ、*TOG* と公民権運動、ベトナム戦争との関連を概観する。次に、「ベニート」と日米関係に関して論じた批評を取り上げ、劇の「黄色」に対する認識の欠落を指摘する。次に、「黄禍論」の歴史とローウェル以前の文学作品を取り上げ、「ベニート」の日米表象に関する理解の手掛かりとする。最後に、両「ベニート」の台詞を吟味し、「黄禍論」の影響を確認して論を終える。

従来の批評（「ベニート」と公民権運動）

まず、「ベニート」と南北戦争、公民権運動の関係を述べる。「ベニート」で、ローウェルは、メルヴィルとホーソーン（Nathaniel Hawthorne, 1804–64）の原作に変更を加え、過去と現在を結び付けた。「ベニート」に関して、ローウェルは次のように語る。「メルヴィルは南北戦争直前に自分の作品を書いた。[...] 私が劇を書いた時、あらゆる事、とりわけ公民権運動の事が念頭にあった」（Billington, "Mr. Robert Lowell on T. S. Eliot and the Theatre" 60）。ローウェルの言葉を受けて、多くの批評家が「ベニート」を過去と現在の黒人差別問題と結び付けて論じるようになった。例えば、1965年、Gelpiは次のように指摘した。「ローウェルはメルヴィルの幻想と現実、アメリカの無垢とヨーロッパの腐敗に関する物語を奇妙な寓話に変えた。この寓話は、黒人と他国に対する権威的・帝国主義的な気質を明らかにし、繰り返し起こるアメリカの歴史上の問題を辿りながら、現在の公民権や外交に関する数々の難事を暗示する」（Gelpi, "He Holds America to Its Ideals: The Old Glory" 136）。また、2002年、Mazzaroは次のように指摘した。『「ベニート・セレーノ」は、『北軍戦没者のために』の主題である公民権運動を補強する形で提示している。だが、当時広く注目を集めた黒人国家主義も含んでいる」（Mazzaro, *Robert Lowell and America* 106）。このように、「ベニート」が公民権運動や他国の黒人差別問題と結びつけて論じられた事が分かる。

従来の批評（「ベニート」と中南米）

「ベニート」は公民権運動の他に、中南米との関係も論じられた。例えば、2002年、Mazzaroは次のように指摘した。「（劇のスペイン船の名をthe San Dominick号からthe San Domingo号に変えた事は）1965年にジョンソン大統領がドミニカ共和国に2万人の海軍を派遣した事と関係があるかも知れない」、「ドミニカ共和国は1962年～63年にかけて、ファン・ボッシュの立憲政体の勃興・滅亡と、軍部による乗っ取りが起こった。さらに、ジョンソンが海軍を送る前から、アメリカ帝国主義はキューバ侵攻（1961）、キューバミサイル危機（1962）、その後の長期に渡る南ベトナムへの介入を開始した」（Mazzaro, *Robert Lowell and America* 105–06）。「旧ベニート」にジョンソン大統領の海軍派遣を当てはめるのは時代的に不可能だが、キューバ侵攻等の中南米政策を読み取るのは正しい理解である。

従来の批評（「ベニート」とベトナム戦争）

次に、「ベニート」をベトナム戦争と結びつけた批評を概観する。これに関しては詳しく吟味する必要がある。何故なら、「ベニート」における「黄色」のイメージは、ベトナム戦争ではなく、それ以前の「黄禍論」と関連付けて理解すべき事項だからである。そもそも、ローウェルは「ベニー

ト」をベトナム戦争とは関係なく創作した。これに関して、ローウェル自身、1976年に次のように語っている。「劇は1962年には完成していた。ベトナムが重大な災難となったのはその後の事だ。ある意味で、劇は預言となった」(Alvarez, "A Poet Talks About Making History into Theater" 126)。ここで簡単にベトナム戦争の推移を示せば、1964年8月、ジョンソン大統領によるトンキン湾決議、1965年2月、プレーク米軍基地への襲撃と北爆の開始、1965年3月、ローリングサンダー作戦の開始、1965年7月、米軍の派兵増強の決定、1966年5月、最大規模の北爆、1968年1月、テト攻勢による敗北の予兆、1968年5月、ベトナム和平会談、1968年10月、北爆停止となる。故に、「ベニート」をベトナム戦争と結び付けるのは年代的に不可能である。

ローウェルがTOGの第二版に変更を加えたのは、「エンデコット」のみである。1976年、ローウェルは次のように語っている。「私は（「エンデコット」に）変更を施し、アメリカの歴史と、当時勃発しつつあったアメリカの大惨事と調和するようにした」(Alvarez, "A Poet Talks About Making History into Theater" 126)。ローウェルが変更したのは「大半がインディアン」の役で、確かにそこにはベトナム人の姿が重ねられている(Lowell, "Note on the revised edition")²。故に、「エンデコット」のみを対象すれば、2002年のMazzaroのように、「フランスの、より最近ではアメリカの植民地の影響から逃れようとするベトナム」と、「民主主義と共産主義の間で道徳上の板挟みとなり、内的葛藤と直面したアメリカ」を読みとる事は正しい(Mazzaro, *Robert Lowell and America* 83)。だが、先の理由により、この理解を「ベニート」に当てはめるのは不可能である。それに関わらず、そうした理解を示す批評が存在する。例えば、1974年、Crickは「グーク」("gook"は一般的に黄色・褐色人種、特に北ベトナム人を指す蔑称)という言葉を用いて、次のように指摘した。「デラノの銃から発射された弾丸の嵐で死ぬバブは、西洋の軍事力に直面する発展途上国を象徴する」、「デラノはかつて称賛した黒人をグークに変える」(Crick, *Robert Lowell* 79)。このように、Crickは1960年代終わりのベトナム反戦運動を主観的かつ強引に批評へ持ち込んでしまっている。

従来の批評（「ベニート」とネイティブ・アメリカン、ベトナム人、日本人）

次は、TOGに日米関係の表象を読み取った批評を紹介する。TOGにベトナム戦争の痕跡を認める事が定着して以来、「エンデコット」のネイティブ・アメリカン／ベトナム人の姿に日本人を読み取る批評家も現れた。例えば、1978年、Axelrodは次のように指摘した。「恐らく、ベトナム人は第二次世界大戦におけるドイツ人や日本人以上に技術的に原始的であった。ローウェルの目には、彼らはアメリカの野心と権力の最初の犠牲者であるインディアンと似たものとして生じた」(Axelrod, *Robert Lowell; Life and Art* 179)。ローウェルが1971年にThe New York Review of Booksへ送った手紙の中で、ベトナムの「ソンミ村虐殺事件」(1968)に触れつつ、「(アメリカは)広島での激しい墮落に躓きもしない」し、「この先一世紀のうちに、誰も虐殺に目を開こうとしないだろう」と語ってニクソン政権を批判した事もそうした理解を後押ししたのだろう("Judgment

Deferred on Lieutenant Calley")。だが、Axelrodが論じているのは「エンデコット」であり、「ベニート」ではない。さらに、従来の批評は、「ベニート」で「黄色」が多用される理由を説明していない。その中で、辛うじて劇の「黄色」を論じたのはStoneだ。1972年、Stoneは劇の「黄熱病」("yellow fever")と奴隸制と結びつけて、「奴隸制のサフラン色は文字通りかつ象徴的にスペインの旗とフランススコに表現されている」と主張した。また、「デラノが与える黄色のカボチャ、アトゥファルの黄金の耳飾り、昇り沈む太陽」の色彩に「奴隸制の性的・経済的搾取」を読み込み、「奴隸制は黒色と黄色による疫病なのだ」と結論付けた(Stone, "A New Version of American Innocence" 141)。このように、仮に「黄色」が着目されたとしても、「セレーノ」は専ら黒人差別問題の文脈で理解されたのだ。

「黄禍論」

次に「黄禍論」の歴史を概観する。「黄禍論」は、黄色人種の興隆が西洋に与えた恐怖のイメージで、19世紀後半から20世紀初頭に流布した。具体的には、経済的な脅威（日本人・中国人が白人労働者の職を奪う事への恐れ）、軍事的な脅威（「アジアの覚醒」の恐れ）、社会・文化的な脅威（キリスト教文明の墮落、異人種間結婚）の形を取った（飯倉、『黄禍論と日本人』42-43）。発端は、三国干渉（1895）の後、ドイツのヴィルヘルム2世が、黄色人種の脅威を外交で利用した事に始まる。彼は、ロシアのニコライ2世に「黄禍」を説き、ヨーロッパの連合を説いた。その際、彼は自身の画案になる寓意画をニコライ2世に贈呈した。この絵は後に「黄禍の図」と呼ばれ、西洋に「黄禍論」が流布する発端になった。このように、「黄禍論」は感覚的かつ映像的なイメージに依拠しつつ、科学的根拠を欠いたまま、白人の優越性を脅かす事になった（飯倉、『黄禍論と日本人』48-53）。

「黄禍論」（第一次世界大戦前後）

次に、アメリカの「黄禍論」を概観する。アメリカの「黄禍論」は、経済的な脅威、文化的差異による危機感、軍事的な危機感（日中軍事同盟の可能性に対する恐怖）、社会進化論の影響が組み合わさって流布した（杉原、『黄禍論』187-88）。最初は中国人移民に対する差別で始まった。だが、その後、日本人移民の増加に伴い、カリフォルニア州で排斥運動が公然化した。サンフランシスコでは、1900年に職工組合が排日を決議し、1905年にはアジア人排斥同盟が組織された。また、日本の日露戦争（1904-05）での勝利によって、排日の気運は、人種的恐怖感を伴う政治的な「黄禍論」となった。こうした流れを受けて、カリフォルニア州では、1919年、州議会のJ. M. インマン上院議員等がカリフォルニア排日協会を組織し、排日運動を展開した。1920年には、「第2次排日土地法」が成立している（松村、『国際交流史』180-194）。

黄禍論（第二次世界大戦時）

「黄禍論」は、第二次世界大戦時にも国内で広まった。当時、アメリカは枢軸国を強く警戒し、戦争を人種の観点から論じる者が現れた。例えば、元UP通信社の極東支配人マイルズ・ヴォーンは、日本は豊臣秀吉の時代からアジアの支配を夢見ており、大東亜共栄圏の創設に従事していると主張し、それが「黄禍論」を現実にすると述べた。また、1942年、ルーズベルト大統領は行政命令9066号に署名し、一世、二世を問わず、国内の日系人を収容所に送った（ドイツ系やイタリア系の人々に対しては同様の措置は取られなかった）。戦場では、海軍司令官ウィリアム・ハルゼーが、日本民族の根絶を求め、口癖のように「ジャップを殺せ、殺せ、もっと殺せ」と主張した。また、米軍兵士は日本兵の耳をそぎ落とし、武勇の証として持ち帰る事もあった（廣部、『人種戦争という寓話』189-99; 213-15）。

一方、国内の黒人は、黄色人種への差別を自分の問題と関連付けて論じた。例えば、『ニグロ・ワールド』は、白人は太平洋の向こうにアジア連合を見ると予言し、批判した（廣部、『人種戦争という寓話』115）。また、1943年には、デトロイトで暴動が起こり、人種間の衝突が表面化した。黒人指導者はこの事件を世界に跨る皮膚の色の問題として捉えた。例えば、1942年、全米黒人向上協会事務局長ウォルター・ホワイトは、ルーズベルトに対し、イギリスがインドに自治を与えるよう働きかけ、さらに、東南アジアのヨーロッパの植民地支配に終止符を打つよう要求した（ソーン、『太平洋戦争における人種問題』42-43）。ローウェルが「ベニート」の白・黒の枠組みに「黄色」を持ち込んだのも、これが理由であろう。

結果として、原爆によって日本は終戦を迎える。原爆投下には様々な事情や複雑な理由があるが、橋爪のように、「その目標が黄色人種であったということにいくらかの正当化が見出されたと考えても間違いない」と指摘する者も多い（橋爪、『黄禍物語』243-44）。

アメリカ文学における「黄禍論」

次に、文学における「黄禍論」の影響を考察する。「黄禍論」は、アメリカ文学に強い影響を及ぼした。例えば、ハート（Bret Harte, 1836-1902）は、1870年に"The Heathen Chinees"を書いた。この詩の中で、ハートは一人の中国人いかさま師を描写し、当時のアイルランド系の金鉱労働者が中国人に抱いていたイメージを書いた（Tarnoff, "#CancelColbert"; ゴルヴィツァー、『黄禍論』114-15）³。また、ロンドン（Jack London, 1876-1916）は日露戦争時に特派員として現地入りし、「黄禍」("The Yellow Peril")を『サンフランシスコ・エグザミナー』に書いた。約5年後には、「もし日本が中国を目覚めさせるなら」("If Japan Wakens China")を『サンセット』に寄稿した。このエッセーの中で、ロンドンは「日本人の心の中でナポレオンのような巨大な夢が燃えていないと誰に言えるのか」と警鐘を鳴らし、日本人と中国人が「広大な人種的冒険」("some vast race-adventure")に乗り出した際の「黄禍」の危険性を説いた("If Japan Wakens

China" 223)。さらに1910年、ロンドンに『マックルアズ・マガジン』に「比類なき侵略」("The Unparalleled Invasion")を掲載し、「黄禍」が席卷する近未来の世界を書いた。この作品は、最終的には、中国が西洋の力(細菌兵器)によって滅亡する物語となっている。(ゴルヴィツァー, 『黄禍論』114-15; 廣部, 『人種戦争という寓話』51-52)。このように、「黄禍論」は、文学の世界に黄色の恐怖を振りまきながら、大きな社会的反響を呼んだのである(杉原「黄禍論」188-89)。

ローウェルと同時代の「黄禍論」

次に、ローウェルと同時代の「黄禍論」表象に関して考察する。「黄禍論」は、第二次世界大戦後、ハリウッド映画の中に生き残った。その代表作が、『チート』(1915)だ。この作品の中で、白人女性のイーディスは、金銭的な罠れによって、早川雪舟(1886-1973)演じるトリに襲われる。最後にトリは裁判で有罪となり、暴徒と化した聴衆に襲われる。結果、映画の観衆は暴徒と同じ視点を持つようになる(Marchetti, *Romance and the "Yellow Peril"* 15)。歴史的に、アジア人男性による白人女性のレイプは、東洋に対する西洋文化の恐怖を反映し、欧米の帝国主義がアジアへ向かう理由になった。Hoppenstandが指摘するように、「黄禍論の固定観念は容易にキリスト教神話へと組み込まれ、東洋は悪魔の役割を負った」のだ("Yellow Devil Doctors and Opium Dens" 174)。また、Higashiが指摘するように、この作品で日本人が攻撃者として描かれるのは、第一次世界大戦直前の「黄禍論」と反移民のレトリックが広まっていた事を反映している("Ethnicity, Class, and Gender in Film" 130)。

第二次世界大戦後、朝鮮戦争やベトナム戦争は、アジア系移民の入国によって、映画・テレビ産業の利潤に繋がった。この時期の映画を「黄禍論」の観点から論じたのがMarchettiである。Marchettiは、サイドを参照にしつつ、「(ハリウッド映画における)ロマンスとセクシャリティは(欧米による東洋の)支配を強化した」と述べる。具体例として、朝鮮戦争時代を舞台にした*Sayonara* (1957)を挙げる事ができる。表向き、この作品は日本人とアメリカ人のロマンスを通じて、戦後の人種的不寛容に異議を唱えているように見える。だが、一見異人種に対する理解があるように見えても、この作品は女性を妻・母の役割に押し留める。その結果、性に対する保守的な姿勢が、人種に対する自由主義的な姿勢を凌駕する。さらに、男性登場人物をアングロ・アメリカ人、女性登場人物を日本人に設定する事で、日本に対するアメリカの家父長主義を支えている(Marchetti, *Romance and the "Yellow Peril"* 6; 126; 135)。同様の傾向は、*Japanese War Bride* (1952)、*The Crimson Kimono* (1959)、*Bridge to the Sun* (1961)、*My Geisha* (1962)等の作品にも見られる。このように、「黄禍論」は映画の世界で根強く生き残ったのである。

「ベニート」と黄禍論

上記の理解を基に、今度はローウェルの「ベニート」を分析し、「黄禍論」の影響を考察する。

まず、ローウェルが1963年にビショップ (Elizabeth Bishop, 1911-79) へ送った手紙を確認する。この手紙の中で、ローウェルは次のように書く。「私は (クロード・) イーザリーの劇を書いてみようと考えている。[...] 彼は広島に向かった飛行機のパイロットの一人だった。彼は罪の意識に囚われ [...]、広島に現金を送り [...]、家族に捨てられ、離婚した後、テキサスの療養所に入り、正気と狂気の間を彷徨い、自分の経験を語りつつ、核戦争に反対した。気高く、同時に哀れで、劇に仕上げる事は難しい。私は平和を訴えるプロパガンダではなく、悲劇を書きたいのだ [...]」(TLORL 426-27)。この時期、ローウェルが書いた政治的かつ「悲劇」的な作品はTOGのみである。また、劇のアメリカ人主人公デラノは、新旧「ベニート」両方の冒頭のト書きに、「不釣り合いにも、麦わら帽子をかぶり、コーンパイプで煙草を吸っている」と書かれている("Benito" 82; TOG 139)。メルヴィルの原作にはない「コーンパイプ」は、原爆投下直後に厚木へ降り立ったダグラス・マッカーサーを想起させる。これらの事から、ローウェルがTOG執筆時に第二次世界大戦時の日米関係を強く意識していた事が分かる。

劇中に「黄禍論」の影響を看破するのは容易である。頻繁に繰り返される「黄熱」("yellow fever") が重要な根拠となる。メルヴィルの原作では「黄熱」ではなく、単純に「熱」("fever")、または「悪性の熱」("malignant fever") と書かれているだけだ (Melville, "Benito" 165; 174; 181; 221; 248)。また、「黄色」は二回しか出てこない。一つ目はスペイン人船長ベニート・セレーノの血色の悪い手を、二つ目はマレーの海賊の手の色を指し、どちらも「熱」と関連付けられてはいない (Melville, "Benito Cereno" 177; 191)。だが、「旧ベニート」では「黄熱」が合計14回、台詞で繰り返される ("Benito" 84; 86; 87; 88; 89; 90; 91; 92; 93; 91)⁴。また、「黄色」はセレーノの血色の悪さを示す「黄色い両手」("yellow hands")、フランセスコの混血を示す2回の「黄色」("yellow-colored") (内一個はト書き)、フランス語の黄色を語源とする「黄疸」("jaundice") を合わせると合計18回現れる ("Benito" 86; 92; 93)。一方、「新ベニート」では「黄熱」が台詞で合計11回繰り返される (*The Old Glory* 148; 151; 159; 168; 176; 177; 185; 186; 193; 200; 201)。さらに、「黄色」はセレーノの「黄色い両手」、フランセスコの「黄色」の肌 (内一個はト書き)、「黄疸」を合わせると合計15回現れる (*The Old Glory* 158; 162; 163; 188; 191; 194; 198)。「新ベニート」は合計76頁である。つまり、5.1頁につき一回の割合で「黄色」が現れ、その殆どが台詞として耳に響く事になる。この事実は、多くの先行研究が提示する「白」と「黒」の二項対立を覆す一方で、ハートやロンドンの「黄禍論」に基づいた作品を想起させるだろう。

次は、劇の台詞に注目し、劇と「黄禍論」に関する文学的連続性を考察する。新旧「ベニート」で最初に「黄熱」が登場するのは、サン・ドミンゴ号がデラノに発見された直後、「2番目の黒人」が語る時だ ("Benito" 84; TOG 148)。「新ベニート」では、その後、黒人奴隷に船を占領されたスペイン人船長ベニート・セレーノが、「黄熱」で「部下のスペイン人たちは黒く変色し、奴隷のように死んでいった」と語り、黒人奴隷の反乱を密かにデラノへ伝えようとする (TOG 159)。その後、黒人反乱の首謀者バブが「黄熱が彼 (セレーノ) の心を破壊した」(TOG 176) と語り、さらに、「王冠を被った高価なスペイン人の人形」を相手にチェスをする「黒人少年の心」も「破壊」

したと語る。さらに後、セレーノの髭剃りに失敗したバブが、復讐として主人に頬を切り付けられたと主張し、「(セレーノの) 神経の悪化と邪悪な熱が私をこんな目に合わせた」と語る (TOG 188)。その後、デラノは、黒人奴隷に対する不手際を難じて、「あの船長 (セレーノ) は黄疸にかかっているに違いない」と決めつける (TOG 198)。このように、黒人達は「黄熱」を白人に対する脅迫として用いる。一方、白人達は、自ら招いた人種差別や帝国主義による「黄禍論」に脅かされ続ける。「黄禍論」を軸にした人種間の相互不信と闘争を書いたという点で、ローウェルはハートやロンドン、その後の映画に表象される「黄禍論」を文学的に引き継いだと言えるだろう。

最後のシーンは、「黄禍論」に纏わる伝統的な表象を刷新するためにある。メルヴィルの原作では、バボ (劇のバブに相当) は捕らえられた後、司法によって処刑される (Melville, "Benito Cereno" 258)。だが、ローウェルは大胆に書き換えた。「旧ベニート」の最後のシーンで、武装したアメリカ人が黒人たちを撃ち殺し、バブを追い詰める。バブは、「俺が王だった。[...] / バブこそが計画し、大胆にもこのサン・ドミンゴ号の捕獲を / 実行したのだ」と語り、降参する ("Benito" 96)。デラノは銃を抜いて構える。ベニートは「あなたは破壊する事で救おうとする」と批判し、バブも「ヤンキーの旦那 / 未来は我々と共にあるのだ」と訴える ("Benito" 96)。だが、デラノは「俺がお前の未来だ」と語って、バブを銃殺する ("Benito" 96)。

暗転の後、「旧ベニート」の舞台は「20年後」に移る。デラノの側にはバブと同じ俳優の黒人召使が立っている。デラノは「見るからに年老いて」、「痛風」に病んでいる ("Benito" 96)。そして、「サンドミンゴ号で起きたあの日を / 私は100回も生きてきた / スペイン人と黒人に関して、私は一日中思い違いをしていた」と後悔する ("Benito" 96)。だが一方で、デラノが悔やんでいるのはベニートのみで、「バブの事では、一時たりとも眠りも失った事はない」と開き直る ("Benito" 96)。その後、デラノの回想が始まり、死の床についたベニートが亡霊のごとく登場する。ベニートは「あなたは何も分かっていない」とデラノを諭す。それに対して、デラノは、「(あの日) 私は自分の善良な性質の犠牲者だったのだ」と答える。それに対して、ベニートは「あなたは船を助けようとして、我々を殺したです」と語り、「恐らく、彼 (バブ) には我々を殺す権利があったのです」と述べて、息絶える。デラノは「王! 王! 王達は死んだのだ / 私は50年の間、共和制の下で豊かに暮らしてきた。[...] 人生とはそういうものだ / [...] / 王なんか糞くらえ!」と叫ぶ。最後に、黒人召使が王冠、王笏、宝玉を身につけた後、「怒れる神の御手だ」と語って、宝玉を王笏で打ち砕き、幕となる。「共和制」のもと、「王達」の殺害を正当するデラノの姿は、アメリカによるドイツと日本への無差別爆撃を、同時に、広島への原爆投下を反映している。また、老いてもなお悔悟と欺瞞を繰り返すデラノには、先に引いたイーザリーの「正気と狂気の間」を行き来する姿が投影されている。「旧ベニート」は1964年8月にShaw誌に掲載され、「新ベニート」は1965年に出版された。以上の点を踏まえれば、8月の出版時期、かつ回想シーンの「20年後」という設定から、ローウェルに広島の大惨劇を追悼する意図があった事は明らかであろう。

なお、「新ベニート」では、デラノの回想シーンが省略されている。「新ベニート」では、「旧ベニート」と同様、アメリカ人がバブを追い詰める。だが、バブは、「俺が王だった」と語り、即座

に宝玉を王笏で打ち砕いて降参する (TOG 213)。この直後に、デラノは「これがお前の未来だ」と語ってバブを銃で殺害し、幕となる (TOG 213-14)。この省略により、「旧ベニート」のデラノ／イーザリーの悔恨の念は一切なくなり、破壊が破壊を呼ぶ情景が一層強調された。ローウェルがこのシーンを削除した理由は、1964年から65年にかけて、原爆投下という過去だけでなく、切迫するベトナム戦争という未来にも重点を置く必要性が生じたからであろう。いずれにせよ、「旧ベニート」と「新ベニート」の両方で書かれているのは、白・黒・黄の枠を超えた人間の権力志向だ。バブ殺害シーンの直前、セレーノは「神よ、彼らはほとんど何も分かっていない！」と叫ぶ (TOG 214)。ローウェルはメルヴィルの原作を書き換える事で、ハートやロンドンの作品、その後の映画で表象されるアジア人に対する差別を乗り越え、永遠に分かり合えない人間の業としての闘争を、より普遍的かつ預言的な、「プロバガンダではなく、悲劇」として提示したのだ。だが、より普遍的世界観を支えるために、ローウェルが「黄禍論」を応用し、「ベニート」に日米関係の歴史を反映させた事は、以上の考察から明らかである。

Works Cited

- Axelrod, Steven Gould, editor. *The Critical Response to Robert Lowell*. Greenwood, 1999.
- , editor. *Robert Lowell: A Reference Guide*. G. K. Hall, 1982.
- , editor. *Robert Lowell: Essays on the Poetry*. Cambridge UP, 1986.
- . *Robert Lowell: Life and Art*. Princeton UP, 1978.
- Bell, Vereen M. *Robert Lowell: Nihilist as Hero*. Harvard UP, 1983.
- Billington, Michael. "Mr. Robert Lowell on T. S. Eliot and the Theatre." *Profile of Robert Lowell*. Ed. Jerome Mazzaro. Charles E. Merrill, 1971. 59-61.
- Bloom, Harold, editor. *Modern Critical Views: Robert Lowell*. Chelsea House, 1987.
- Cooper, Phillip. *The Autobiographical Myth of Robert Lowell*. U of North Carolina P, 1970.
- Cosgrave, Patrick. *The Public Poetry of Robert Lowell*. Taplinger, 1970.
- Crick, J. F. *Robert Lowell*. Oliver, 1974.
- Doreski, William. *Robert Lowell's Shifting Colors: The Poetics of the Public and the Personal*. Ohio UP, 1999.
- . *The Years of Our Friendship: Robert Lowell and Allen Tate*. UP of Mississippi, 1990.
- Dower, John W. *War without Mercy: Race and Power in the Pacific War*. Pantheon Books, 1986.
- Fein, Richard J. *Robert Lowell*. Twayne, 1970.
- Grobe, Christopher. *The Art of Confession: The Performance of Self from Robert Lowell to Reality TV*. New York UP, 2017.

- Hamilton, Ian. *Robert Lowell: A Biography*. Faber, 1982.
- Hart, Henry. *Robert Lowell and the Sublime*. Syracuse UP, 1995.
- Hayes, Paula. *Robert Lowell and the Confessional Voice*. Peer Lang, 2013.
- Heep, Hartmut. *A Different Poem: Rainer Maria Rilke's American Translators Randall Jarrell, Robert Lowell, and Robert Bly*. Peter Lang, 1996.
- Heymann, C. David. *American Aristocracy: The Lives and Times of James Russell, Amy, and Robert Lowell*. Dodd, 1980.
- Higash, Sumiko. "Ethnicity, Class, and Gender in Film: DeMille's *The Cheat*." *Unspeakable Images: Ethnicity and the American Cinema*. Ed. Lester D. Friedman. U of Illinois P, 1991. 112-39.
- Hobsbaum, Philip. *A Reader's Guide to Robert Lowell*. Thames, 1988.
- Hochman, Sandra. *Loving Robert Lowell*. Turner, 2017.
- Hoppenstand, Gary. "Yellow Devil Doctors and Opium Dens: A Survey of the Yellow Peril stereotypes in Mass Media Entertainment." *The Popular Culture Reader*. Ed. Christopher D. Geist. Bowling Green University Popular Press, 1983. 171-85.
- Hsu, Madeline Y. *The Good Immigrants: How the Yellow Peril Became the Model Minority*. Princeton UP, 2017.
- Jamison, Kay Redfield. *Robert Lowell: Setting the River on Fire*. Alfred A Knopf, 2017.
- Kalstone, David. *Becoming a Poet: Elizabeth Bishop with Marianne Moore and Robert Lowell*. U of Michigan P, 1989.
- Kirsh, Adam. *The Wounded Surgeon: Confession and Transformation in Six American Poets*. W. W. Norton, 2005.
- Kość, Grzegorz. *Robert Lowell: Uncomfortable Epigone of the Grands Maîtres*. Peter Lang, 2005.
- London, Jack. "If Japan Awakens China." *The Archive of American Journalism*, 28 Aug. 2019, <http://www.historicjournalism.com/jack-london.html>. Accessed 6 Oct 2019.
- London, Jack. *The Radical Jack London: Writings on War and Revolution*. U of California P, 2008.
- London, Jack. *Revolution and Other Essays*. CreateSpace Independent Publishing Platform, 2016.
- London, Jack. *The Strength of the Strong*. Createspace Independent Pub, 2017.
- London, Michael, editor. *Robert Lowell: A Portrait of the Artist in His Time*. David Lewis, 1970.
- Lowell, Robert. *Collected Poems*. Farrar, 2003.
- Lowell, Robert. *Collected Prose*. Farrar, 1987.

- . *The Letters of Robert Lowell*. Farrar, 2005.
- . *The Old Glory*. Farrar, 1964.
- . *The Old Glory: Three Plays*. Farrar, 1968.
- . *The Oresteia of Aeschylus*. Farrar, 1978.
- . *Phaedra and Figaro*. Farrar, 2005.
- . *Prometheus Bound*. Farrar, 1967.
- . *Selected Poems*. Farrar, 2006.
- Mariani, Paul. *Lost Puritan: A Life of Robert Lowell*. W. W. Norton, 1994.
- Martin, Jay. *Robert Lowell*. U of Minnesota P, 1970.
- Matterson, Stephen. *Berryman and Lowell: The Art of Losing*. Barnes, 1988.
- Mayer, Ruth. *Serial Fu Manchu: The Chinese Supervillain and the Spread of Yellow Peril Ideology*. Temple UP, 2013.
- Mazzaro, Jerome. *The Achievement of Robert Lowell: 1939-1959*. U of Detroit P, 1960.
- . *The Poetic Themes of Robert Lowell*. U of Michigan P, 1965.
- , editor. *Profile of Robert Lowell*. Charles E. Merrill, 1971.
- . *Robert Lowell and America*. Xlibris, 2002.
- . *Robert Lowell and Ovid*. Xlibris, 2000.
- Meiners, R. K. *Everything to Be Endured: An Essay on Robert Lowell and Modern Poetry*. U of Missouri P, 1970.
- Métraux, Daniel A. "Jack London, Asian Wars and the "Yellow Peril"." *History News Network*, 2019, <https://historynewsnetwork.org/article/123122>. Accessed 6 Oct 2019.
- Meyers, Jeffrey. *Manic Power: Robert Lowell and His Circle*. Macmillan, 1987.
- Meyers, Jeffrey. *Robert Lowell in Love*. U of Massachusetts P, 2016.
- , editor. *Robert Lowell: Interviews and Memoirs*. U of Michigan P, 1988.
- Nohrnberg, Peter C. L. *The Book the Poet Makes: Collection and Re-collection in W. B. Yeats's The Tower and Robert Lowell's Life Studies*. Harvard UP, 1994.
- Perloff, Marjorie G. *The Poetic Art of Robert Lowell*. Cornell UP, 1973.
- Price, Jonathan, editor. *Critics on Robert Lowell*. U of Miami P, 1972.
- Raffel, Burton. *Robert Lowell*. Frederick, 1981.
- Ricks, Christopher. *True Friendship: Geoffrey Hill, Anthony Hecht, and Robert Lowell under the Sign of Eliot and Pound*. Yale UP, 2010.
- Rotella, Guy. *Castings: Monuments and Monumentality in Poems by Elizabeth Bishop, Robert Lowell, James Merrill, Derek Walcott, and Seamus Heaney*. Vanderbilt UP, 2004.
- Rudman, Mark. *Robert Lowell: An Introduction to the Poetry*. Columbia UP, 1983.

- Ruhl, Sarah. *Dear Elizabeth: A Play in Letters from Elizabeth Bishop to Robert Lowell and Back Again*. Faber, 2014.
- Smith, Vivian. *The Poetry of Robert Lowell*. Sydney UP, 1974.
- Spivack, Kathleen. *With Robert Lowell & His Circle*. Northeastern UP, 2012.
- Staples, Hugh B. *Robert Lowell: The First Twenty Years*. Farrar, 1962.
- Stone, Albert E. "A New Version of American Innocence: Robert Lowell's *Benito Cereno*." *The Critical Response to Robert Lowell*. Ed. Steven Gould Axelrod. Greenwood, 1999. 137-48.
- Stuart, Sarah Payne. *My First Cousin Once Removed: Money, Madness, and the Family of Robert Lowell*. Harper, 1998.
- Tarnoff, Ben. "#CancelColbert, Meet 'the Heathen Chineer'-Stephen Colbert, Viral Racism and 150 Years of Not Getting the Joke." *Politico Magazine*, 5 Oct. 2019, <https://www.politico.com/magazine/story/2014/04/cancelcolbert-meet-the-heathen-chineer-105495>. Accessed 6 Oct 2019.
- Tchen, John Kuo Wei and Yeats, Dylan., eds. *Yellow Peril!: An Archive of Anti-Asian Fear*. London: Verso, 2014.
- Thompson, Richard Austin. *The Yellow Peril: 1890-1923*. New York: Arno Press, 1978.
- Tillinghast, Richard. *Robert Lowell's Life and Work: Damaged Grandeur*. U of Michigan P, 1995.
- Travisano, Thomas, editor. *The Complete Correspondence between Elizabeth Bishop and Robert Lowell*. Farrar, 2008.
- Vendler, Helen. *The Given and the Made: Strategies of Poetic Redefinition*. Harvard UP, 1995.
- Wallingford, Katharine. *Robert Lowell's Language of the Self*. U of North Carolina P, 1988.
- Williamson, Alan. *Pity the Monsters: The Political Vision of Robert Lowell*. Yale UP, 1974.
- Witek, Terri. *Robert Lowell and Life Studies*. U of Missouri P, 1993.
- Wu, William F. *The Yellow Peril: Chinese Americans in American Fiction, 1850-1940*. Archon Books, 1982.
- Yenser, Stephen. *Circle to Circle: The Poetry of Robert Lowell*. U of California P, 1975.
- 麻田貞雄.『両大戦間の日米関係—海軍と政策決定過程』. 東京大学出版会, 1993.
- 飯倉章.『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説』. 彩流社, 2004.
- .『黄禍論と日本人』. 中央公論新社, 2013.
- 加藤秀俊編.『日本とアメリカ——相手国のイメージ研究』. 日本学術振興会, 1991.
- 亀井俊介,川本皓嗣編.『アメリカ名詩選』. 岩波書店, 1993.

- 北村洋.『敗戦とハリウッド—占領下日本の文化再建—』.名古屋大学出版会, 2014.
- 貴堂嘉之.『アメリカ合衆国と中国人移民—歴史のなかの「移民国家」アメリカ—』.名古屋大学出版会, 2012.
- 桑原隲蔵.『桑原隲蔵全集 I』.岩波書店, 1968.
- 杉原達.「黄禍論」.『強者の論理——帝国主義の時代』.歴史学研究会編.東京大学出版会, 1995. 181-93.
- 巽孝之.『近未来戦争小説の起源——別冊解説』.アティーナ・プレス, 2011.
- 西川長夫編.『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』.柏書房, 1999.
- 橋川文三.『黄禍物語』.岩波書店, 2000.
- 平川祐弘.『内なる壁』.TBSブリタニカ, 1990.
- .『完本 和魂洋才の系譜; 内と外からの明治日本巻』.河出書房新社, 2016.
- .『西欧の衝撃と日本』.講談社, 1985.
- .『和魂洋才の系譜——内と外からの明治日本——』.河出書房新社, 1971.
- 廣部泉.『人種戦争という寓話』.名古屋大学出版会, 2017.
- 本多勝一.『殺される側の論理』.朝日新聞社出版局, 1982.
- 松尾式之.『共和党と民主党』.講談社, 1995.
- 松村正義.『国際交流史——近現代の日本——』.星雲社, 1996.
- .『日露戦争と金子堅太郎—広報外交の研究—』.新有堂, 1987.
- .『ポーツマスへの道—黄禍論とヨーロッパの末松謙澄—』.原書房, 1987.
- 歴史学研究会編.『強者の論理——帝国主義の時代』.東京大学出版会, 1995.
- A・フランス.『白き石の上にて』.白水社, 1950.
- カレイ・マックウィリアムス.『日米開戦の人種的側面 アメリカの反省1944』.渡辺惣樹訳.草思社, 2012.
- クリストファー・ソーン.『太平洋戦争における人種問題』.市川洋一訳.草思社, 1991.
- サックス・ローマー.『怪人フー・マンチュー』.嵯峨静江訳.早川書房, 2004.
- ジェラルド・ホーン.『人種戦争——レイス・ウォー——太平洋戦争 もう一つの真実』.祥伝社, 2015.
- ジョン・W・ダワー.『人種偏見——太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』.ティビーエス・ブリタニカ, 1987.
- .『容赦なき戦争——太平洋戦争における人種差別』.平凡社, 2001.
- ハインツ・ゴルヴィッツァー.『黄禍論とは何か——その不安の正体』.瀬野文教訳.中央公論新社, 2010.
- ハロルド・R.アイザックス.『中国のイメージ—アメリカ人の中国観—』.サイマル出版会, 1970.
- フィリップ・ジャカン.『海賊の歴史』.後藤淳一他訳.創元社, 2003.
- H・リー.『日米必戦論』.原書房, 1982.

マルサス.『人口論』. 斉藤悦則訳. 光文社, 2011.

R・ウィルソン.『ジャパニーズ・アメリカン—日系米人・苦難の歴史』. 猿谷要訳. 有斐閣, 1982.

R・ホフスタター.『アメリカの社会進化思想』. 後藤昭次訳. 研究社, 1973.

W・K・フォン・ノハラ.『黄禍論——日本・中国の覚醒』. 高橋輝好訳. 国書刊行会, 2012.

ロスロップ・スタッダード.『有色人の勃興』. 長瀬鳳輔訳. 政教社, 1921.

ロバート・G・リー.『オリエンタルズ——大衆文化のなかのアジア系アメリカ人』. 貴堂嘉之訳.
岩波書店, 2007.

¹ " [O] n Boylston Street, a commercial photograph / shows Hiroshima boiling // over a Mosler Safe, the "Rock of Ages" / that survived the blast." (Lowell, *CP* 377) 翻訳は『アメリカ名詩選』を参考にした (272-81)。

² *TOG*第二版の「序」から引用。なお、頁数は記されていない。

³ ハートは、この詩で白人（アイルランド系アメリカ人）の中国人差別を批判した。だが、後世の人々は、この詩に込められた皮肉を誤解し、逆に差別の道具として使用した (Tarnoff, "#CancelColbert")。

⁴ 内一個はパーキンズの台詞 "Is it just the fever that makes the captain's face so yellow?" である ("Benito" 88)。今回はこれも「黄熱」として数える。